

第10回 厚木看護専門学校 学校関係者評価委員会 議事録

日時：2025年6月27日(金)

15:50～16:50

場所：厚木看護専門学校 会議室

1 出席者（8人）

- (1) 渡辺 美和（神奈川県リハビリテーション病院 副院長兼看護部長）
- (2) 郡山 美恵子（厚木市立病院 副院長兼看護部長）
- (3) 佐藤 裕子（愛光病院 教育担当看護科長）
- (4) 佐久間 謙一（厚木看護専門学校 同窓会長【愛光病院 副看護局長】）
- (5) 榊 恵子（神奈川県立保健福祉大学 看護学科教授）
- (6) 磯部 真理子（厚木看護専門学校2年生 保護者）
- (7) 井上 礼子（厚木看護専門学校2年生 学生自治会長）
- (8) 金泉 凧音（厚木看護専門学校1年生 学生自治会副会長）

2 欠席者（2人）

- (1) 益井 明子（講師）
- (2) 風間 徹（厚木市松枝地区 自治会長）

3 厚木看護専門学校教職員出席者（5人）

学校長 五十嵐一美、副学校長 田原裕子、看護学科長 島田真由美、
総務課長 茂木憲明、看護学科技幹 中原真弓
（オブザーバー：看護学科総括主査 高橋隆子、看護学科総括主査 池田紀子）

4 議題

- (1) 報告
 - ア 自己点検・自己評価 2024年度の結果と取り組み
 - イ 2024年度 明日の厚木看護専門学校を考える会 アンケート結果
 - ウ 2025年4月新入学生へのアンケート結果
- (2) 報告に関する質疑応答、意見交換
- (3) 配付資料
 - ア 2026年度入学生用 スクールガイダンス
 - イ 2024年度 自己点検・自己評価報告書
 - ウ 2024年度 明日の厚木看護専門学校を考えるアンケート結果
 - エ 2025年4月新入学生へのアンケート結果
 - オ 委員会名簿
 - カ 委員会規程
 - キ 座席表

5 内容等

【進行：田原副学校長】

配付資料の確認、委員紹介を行った。

【五十嵐学校長挨拶】

まず国家試験の結果をご報告申し上げます。2024年度卒業生80名のうち、合格者は75名、合格率は93.8%であった。全国平均合格率90.1%は上回ったが、新卒看護師のみの全国平均合格率95.9%は下回った。この結果を反省し試験対策強化の取り組みを実施しているところである。

今年度、新入生が88名入学した。他の看護専門学校が非常に学生確保に苦慮しているなか、定員を上回る学生数を確保できた。学校評価は入学者数に直結すると考えている。

本日、委員皆様への報告が4点ある。

1点目は、2024年度、厚生労働省の「看護現場におけるデジタルトランスフォーメーション促進事業」いわゆる医療DXを進める施策において、看護専門学校にも補助金を出す事業があった。全国8校が選定されたなかに当校が選ばれ、補助金額1,380万円を頂戴した。当校4階の大きな教室(第4・第5教室)を工事し、内田洋行株式会社が製作している「FUTURE CRASS ROOM」という部屋を作った。この部屋は大画面投影ができる。現時点ではこの部屋をさらにバージョンアップするため、教員が教材研究の取り組みとしてブラッシュアップさせていくところである。

2点目は、海外研修についてである。本日机上に海外研修ポスター「LOS ANGELES NURSING STUDY TOUR」を配らせていただいた。昨年度の学校関係者評価委員会でも、一部頭出しでご紹介させていただいたが、いよいよ実行に移す段階になった。来年3月にロサンゼルスでの海外研修の実施を計画している。これからの時代を担う看護学生たちに、チャンスがあれば世界を見てほしい、体験してほしい、という思いである。今の看護学生たちが臨床で働く頃には、日本だけにとどまらない様々なグローバル視点が非常に有効になると思う。世界で一流と言われる医療施設の見学とか、アメリカの学生との交流を企画しているところである。

3点目は、今年度、日本SDGs協会の認定校を目指して、申請の準備をしているところである。学生と一緒にSDGsの発信拠点校として取り組んでいく。学生と一緒にプロジェクトを立ち上げており、先日、第1回目を開催した。今年度中に認定校申請をして、次年度、報告できればと思う。

4点目は、厚木市が委託運営する「学習支援学級」の生徒を7月31日(木)に招いて、看護・医療体験とか、職業選択の情報提供を行う。この取り組みは当校の地域貢献の一環として行う。このことを機会に、さらに地域に開かれた学校を目指し、そのための学校づくりを推進したい。

以上4点、新たな取り組みを開始する。この取り組みに関して、また本日の議題について、ぜひ忌憚のないご意見をいただき、よりよい学校運営に利用していきたい。どうぞよろしくお願いする。

【中原技幹】

配付資料に基づき、報告事項のア、イ、ウを説明した。

【島田学科長】

次の内容を口頭により報告した。

①ダブルスクールの進捗状況

キャリアアップへの道を開くためのオプションとして、2023年度入学生より希望者を対象として、放送大学と連携したダブルスクール制度をスタートさせ今年で3年目となる。

第3期生を迎え、現在1年生11名、2年生14名、3年生6名が在籍し取り組んでいる。3年生は今後、看護学士取得を目標としており、「看護学生作文コンクール」など、文章表現能力を培われるような支援も含め、当校卒業後の支援継続や母体病院との連携も視野に調整を続けているところである。

②「Self-Learning-Day」

2022年度のカリキュラム改定で、科目間の重複を極力なくし、学生が自律的に自学自習できる時間を増やしたいという狙いから、2,760時間と少なめの履修時間に設定した。

そして講師や時間割を調整し、昨年度から学生の登校日を週4日とし、金曜日は学生が自由に学習に活用する日、「Self learning day」を開始することができた。

今年度1年間、1・2年生が実践し、3月にアンケート調査を実施したところ、学習デザインができたと答えた学生の割合は1年生80%、2年生76%だったが、自己決定の度合いが高まり段階が進み、単位取得に向けて結果を残せた。学生の内発的動機付けにつながったと考えている。

また「Self learning day」があることでの変化は「学習時間が増えた」「学習の質が改善」「月～木曜日の集中力の向上」「体調を崩さない」などが9割以上表現された。

学校に来ての学習内容は主に演習や欠課課題学習が多く、学校外での内容は大半が課題や試験勉強だが、病院のインターシップへの参加や自己の成長のためのボランティアや資格取得などもあった。

基礎学力に課題がある学生については、大学生講師による塾を11回開催し、学習の方法などを修得し、後期の定期試験の結果につながった学生もいた。今年度も実施する予定である。

そして今年度は、3月に行われる海外研修や国際化に対応する取り組みとして、「英会話サロン」を5月から開催しており、5名の学生が参加した。

【田原副学校長】

4の(2)報告に関する質疑応答、意見交換に入る前に、本日欠席されておる益井委員から事前意見を頂いた内容をご紹介します。

【益井委員意見】

「資料2」に記載のアンケート結果では、各学年とも、他の項目と比較して⑧項目「満足していない」の回答割合が高くなっている。私自身は十分なICT環境が整備されていると認識しているのだが、昨年度に引き続き、このような評価が続いている要因について明らかになっていることがあればお伺いしたい。

当方担当科目「論理的思考と表現」では、講義資料の閲覧や調べ学習の際にタブレットを使用しているが、毎回提出するワークシートは手書き形式とし、学生が自らの考えを整理する問いを設けている。現1年生の学生からは「手書きによる提出は本科目のみである」との声も聞かれている。現在、多くの科目でICTを活用した授業が実施されているなか、このような運用を継続することが、学校全体の方針と乖離していないか懸念している。

また第114回看護師国家試験では、読解力が一層重視される出題傾向が見られた。これを踏まえ、今年度より毎回の講義で600字程度の新聞コラムを読む機会をできるだけ設けている。ただし現時点では「文章の読み方」について講義内で明示的に扱っておらず、学生に自由に読ませ感想をまとめさせる形式にとどまっている。今後本科目において、読解力の向上に向けた具体的な指導内容を盛り込む必要があるのかについてもご意見を賜りたい。

【井上委員】

益井先生の質問ではICTのことを気にしていらしたが、学生側からするとICTそのものよりも、Wi-Fiの接続環境があまり整っていないことや、夏場のエアコンに制限を設けられながら使用していることに、学生から不満の声が上がっている。

【金泉委員】

ICTのフォロー面についてである。1年生は、初めてICTに触れる人が多い。使い方が分からなくて、自分で使い方を模索する感じとなり、ICTスキルに関して不安を訴える意見が出てしまったと思う。

【島田学科長】

エアコンの稼働については、SDGsの推進、地球環境を守ることを昨年度も説明して、学生皆の協力を得たと思う。しかし今年度は今までと少し違う暑さになってきた。6月から9月にかけて非常に暑くなっている。教員は学習環境を整えるよう、少し気を使っているつもりではある。総務課でも適時温度を見ながら環境を整えるよう対応している。

Wi-Fiは、必ずクラスに1人や2人、Formsに入れない事象があった。教職員はいつでもWi-Fi環境を調べられるようにしていて、Formsで支障が出た際に直ぐに状況確認できるようにしている。確認すると大抵Wi-Fiの状況は問題がない。この場合i-phoneで入ってもらったりしている。

1年生のICTスキルについてである。今の2年生が不安な思いをしたため、それに対応するため、2年生全体で1年生をフォローする取り組みをしている。この取り組みが今年度末の「明日の厚木看護専門学校を考えるアンケート」評価にどう反映されるか。

【井上委員】

エアコン稼働については、最近先生方が、校内実習では実習室を涼しい設定にしてくれていて、今年度は、昨年度よりは改善されていると思う。アンケートは昨年度末に実施されており、エアコンを自由に使えるようにしてほしいという意見が多く上がっている状況と思う。

【榊委員】

エアコン稼働はどのような制限をしているのか。

【五十嵐学校長】

26℃である。体育とか実習演習をするときなどは26℃設定では厳しいことは分かる。しかし基本的には文科省、厚労省が学校として推奨している温度に設定する。

エアコンは動かさないわけではない。総務課で温度調整はできる。20℃とかに下げることでもできる。それを26℃に戻す。昨年度、イタチごっこのように温度管理を行っていた。かつて当校は冷蔵庫のように冷房を効かせていた。登校すると20℃とか18℃とか、まるで冷蔵庫だった。

しかしこれでは環境にも体調的にもまずいと。地球環境にも大きな影響がでる。環境問題に取り組むことは、世界的にもスポットが当たっている。今回SDGsの認定校として取り組みを始める。学生皆さんと相談し、良いバランスで取り組まなければならないと思う。

【田原副学校長】

地球環境問題を考えることは、今後、学校側と学生で考えていくこととなると思う。島田学科長から話があったように、最近は尋常でない暑さになってきている。この先もっと酷い状況になることも予測される。無理に我慢することはないけれど、可能な努力を皆で一緒に取り組むことも大切だと思う。

冷房効率を高めるための方法を皆で一つ一つ考えていけばいい。設定温度を1℃上げても扉を閉めれば涼しくなるとか、冷却した空気を人の集まる場所に行き渡らせる方法を模索し、いろいろ工夫して皆で取り組んだら良いと思う。

Wi-Fiについては引き続き課題もあると思うので、今後の課題とさせていただきたい。

お配りした資料のなかで、不明瞭な点とか、疑問や課題等何かあればご意見いただければと思う。

【榊委員】

今のことにも関連するが、国家試験合格率に影響が出てきているなか、タブレットを使用する学校は増えてきている。試行錯誤しているところはあると思うが、メリットとデメリットはどのようなものが出てきているか。

タブレットを使い直ぐに調べて知識を得るとか、学習の動機にはとてもよいけれど、思考能力を鍛えたりすることには、今一步難しいところがあると聞いている。

【島田学科長】

自ら学ぶ姿勢の面では、知らないことがあると授業中でも直ぐに調べている様子が見える。今の学生は生成AIを使わないといけなくなる時代に生きる人になるだろう。AIへの質問方法とか探し方とか、これから学ぶこととなる。

教員からみると授業を聞いているか、授業中にゲームをしていないか心配になる。タブレットは学習意欲の動機付けにはなるが、思考力を身に着けるには工夫が必要である。

例えば国家試験問題を1年生に取り組んでもらう。ただ解答するだけでなく、なぜこの解答を選んだのか、その根拠となる知識を書きなさいと、出題方法を工夫している。その工夫が学生にどのように映っているのかはわからないが、様々な授業で工夫をしているところである。

【井上委員】

看護学校の教科書はすごく量が多いと入学前から聞いていた。タブレットを導入したことで教科書内容がタブレットに含まれ、荷物が少なくなることがメリットだと思う。

デメリットは、タブレットは授業中に別のページを開くことも容易である。このため学習に集中できていない学生の数はそれなりにいると感じている。

【田原副学校長】

神奈川県立保健福祉大学において、タブレットを使うことで課題となっていることはあるか。

【榊委員】

自分はタブレットを使った授業は行っていない。コロナ禍のあとは、授業資料を学生が電子媒体で欲しいようになった。別の授業中にパソコンで授業資料媒体を開いている。

実習の授業もパソコンを使う学生もいれば、手書きで対応する学生もいる。他の学校では、関連図など、データを入れると生成AIですぐに作れてしまう。それを実習先に持参して実習記録に写している学生がいる。どう対応すればよいか相談を受けたこともある。レポート精度が高い人は、恐らくChatGPTなどの生成AIを使っていると思う。

生成AIの良さはもちろんあるが、根拠となるデータはインターネット上の情報しかない。間違っていることもあると思う。一方で、自分で文献等を調べながら論理的な思考ができるようになる人もいる。ICTへの課題には自分も関心を持っている。

【五十嵐学校長】

ChatGPTなどの生成AIを使い、文章を作ることを5日間続けると、自分で文章を作れなくなることが明らかになっている。生成AIに脳が依存するようになる。

このため、使い方を教育する必要がある。生成AIは非常に便利だし、有効活用できる部分はある一方で、ロジックが作れなくなるとは明らかである。さらにChatGPTは嘘をつくこともある。使う側がそれを見極められる力もなく使い続ける怖さがある。

今後は、生成AIの正しい活用方法の教育が必要になると思う。生成AIの排除は絶対できないだろう。これから先、もっと手軽に使えるようになるだろう。ただし生成AIの使い方には制限がなくなると怖い。

どのように使えば有効なのか。思考力をもつ私たちの考える脳の機能に、どのようなデメリットをもたらすのか。新カリキュラムの授業として、脳科学的に学生たちに教育するプロセスが必要と感じている。

【田原副学校長】

リテラシー（読み書きの能力）は課題になるだろう。

臨床現場においても看護記録の記載などで、活動の中で手書きが少なくなっている現状があると思うが、そのメリット、デメリットについてご意見いただきたい。

【渡辺委員】

神奈川県看護協会の研修において、ChatGPTの使い方の研修がある。研修の際に驚いたことがあった。

研修後、看護部長室に挨拶に来られた人が、研修の感想を述べたあと「とChatGPTは言っていました」とつけ加えた。「ではあなたは自分の病棟に戻りどのように活かしたいと思うか」と問いかけたら、黙ってしまった。

「正しい使い方」を教育しなければいけない。教育する側のコミュニケーションスキルも求められると実感している。

【郡山委員】

今の新人看護師はキーボードを打てない。一方でスマホではフリック入力を駆使しすごく早い。タブレットもフリック入力している。

インターネットで何でも調べる時代である。1年目の新人看護師は、先輩に勉強してきなさいと言われると、全てネットで調べてきて、「ここに書いてありました」と先輩に持ってくる。これはもう「しょうがないのかな」と思う部分もある。

厚木看護専門学校でも本年度から実習先でタブレットを使って実習記録を入力している。指導者側がまだ慣れておらず、なかなか共有しにくい面があると聞いている。学生を受け入れる指導者側も対応を考えていかなければならない。

当方の病院はまだアナログで、何でもペーパーであり、まだついていけない部分はある。タブレットでいろいろな疑問を感じたときに、その場で直ぐ調べられることはいいことと思う。

授業中でも分からないことを直ぐ調べるのはいい。しかし、果たして授業に集中できるのかどうかは疑問が残る。以前、私が厚木看護専門学校で講義をしていた際は電子手帳の時代で、手元に便利な手帳があると気になってしまい、集中力を欠いてしまう学生はいた。タブレットもそれに近いと思う。

【五十嵐学校長】

これは私の想像だが、授業中に違うページを開くことが習慣化していたら、依存治療が必要かもしれないと思う。アルコールとかタバコと一緒に、本来やってはいけない場所や時間でもセーブがかからず手がでてしまうのは、「治療」の範囲に入るのではないかと。手放せない。授業中でもやらないと落ち着かない。

授業中は自由ではない。規制するつもりはないけれど、教育側として授業管理という面で、正しい使い方を指導しなければいけない部分と思う。

【佐藤委員】

紙の教科書の時代から厚木看護専門学校で講師をしている。

タブレットの画面で何を見ているか分からない。このため授業中になるべく他の画面に行かせないような工夫が以前よりも求められるだろう。実習記録のタブレット入力は、初めての導入なので、現時点ではそれほど混乱はないと思う。

しかしこれから先、タブレット世代が臨床に入ってくる。実習指導者側としても受け入れていかなければならないと感じる。

看護師研修後に必ず振り返りを書かせているが、苦慮している。文章を書くことは、年々、上手でなくなってきたと感じる。臨床でも継続して育てていく。

【佐久間委員】

今後、注意しなければいけないのは、ICTとかAIを使えるけれども、その使った情報を看護にどう活かすかである。

民間病院は看護師の就職数が少なくなってきており、看護師人口も減っている。一人の看護師で何人もの患者さんを診なければならなくなる。そのときにICTとかAIは使わざるを得ない。そもそも使い方を間違ってしまうと、患者の容体変化など大事なところを見落としてしまう可能性がある。

このような状況で、患者さんはさらに増えていく一方である。学生のうちに看護師になったときにAIをどう活用するか考えた方がよい。

【磯部委員】

うちの息子もChatGPTを使って勉強している。単語一つ検索すればそれに関連する問題や課題がたくさん表示されるのを見て、紙媒体の我々世代からしてすごく便利になったと思う。

息子の使い方としては、国家試験の問題を解き、答えを丸暗記するのではなく、その答えがどうして導かれるのか、メカニズムを調べている。そうすると覚えやすいと私に説明してくれる。一方で依存症につながることも聞き、複雑な思いである。授業中に文章を書く際、使っていないかと心配になる。保護者としても複雑な思いである。

【五十嵐学校長】

AIは使うべきときに使うのはいいことだと思う。使ってはいけない場面で我慢できずに使っているとよくない。

国家試験の4問選択する問題。本当の解答は1番で、ChatGPTに1番が正解だというロジックは何かと聞けば教えてくれる。ところが解答が2番で、そのロジックは何かと聞くと、2番が本当の正解のようにロジックを答えてしまう。

ChatGPTは誤答も正答にできる力を持っている。臨床で働く看護師であれば「えっ」引っかけを感じて、おかしいと気づくと思うが、学生たちの今の看護知識レベルだと完全に騙されると思う。このような力もChatGPTの力の一つであり、好きに解答が作れてしまうことを理解して使わないといけない。

ChatGPTで論文を検索すると、〇〇大学の××論文ですねと答える。そんな大学は日本に存在しないのに、〇〇大学ですと答える。□□理論の△△先生の論文を読みたいと検索すると▲▲先生ですねと答えるが、▲▲先生は実在しない。このような解答も平気で出してくる。あたかも実在する論文のように出してくる。このような場合があることが分からないと完全に騙されると思う。

【田原副学校長】

先ほど益井先生の質問で出ていた読解力とか文章の表現について、より効果的な読解力の向上に向けた方法など、委員皆様のご意見をいただきたい。

【五十嵐学校長】

読解力と記述力というのは、私はまるで違う能力だと思っている。本を読めば文章が書けるとよく聞くのだが、あれは絶対違って、本はさらりと読んでも意味はなくて、それを解説する力をつける必要がある。

記述については、今、生成AIを注目したい。授業でレポート課題を出して、オンラインで試験をする際、学生が書いてきた文章をAIが採点する。その解説をみると、ロジックを重視している。論理が矛盾したりロジックが繋がらないことに、AIはすごく厳しく点数をつけていた。この場合のAIはとても良い使い方だと思った。

人間が採点すると80人の文章を一つずつ、ロジックを確認しながら読み解くことになるが、かなり労力が必要となる。AI採点は素早い。100点の学生の文章を読んでも、素晴らしい文章と感じた。

AIは、文章のこの部分のロジックが崩れている。この部分の論理が矛盾しているとフィードバックしてくれる。あとはそこを学生が真摯に受け止め、再度チャレンジしていけばよいと思う。これがAI採点のメリットである。

【島田学科長】

3年生の研究の授業で、AI採点したところ、最初30点の学生が、7回受け直して90点が取れるようになった。最初はAIに悪いところを指摘され直したものの思うように点数が上がらず、教員に質問に来ていた。その後、なぜ良い点数とれるようになったか本人に聞いたところ、悪い部分を理解していた。AI採点を面白いと感じ、熱心に取り組む学生も出るようになった。

文章を正しく要約する力は絶対に必要である。ロジックを組みながら要約を書けるようになるには、段階的な学習が必要で、これはICT能力とは全く異なる。授業でも力を入れなければならないと思う。今年に入り、論理的思考に頭が行くような仕組みを作ったところ、国家試験対策模試で、どうしてその解答を選択したのか、それに基づく根拠は何か。書けるようになってきたところである。

【中原技幹】

10分間テストを作った。国家試験模試の○とか×だけでなく、この正解に対してこの知識が必要であり、そのメカニズムを調べていく。この知識をこう使うとこう理解が進むとなる。思考に慣れていない学生も慣れられるようシステムを作り、導入したところである。

【五十嵐学校長】

益井先生の授業は「論理的思考と表現」と、元々そういう類の授業であるが、毎回提出するワークシートを手書き形式とし、学生が自らの考えを整理する問いを設けている。今後、全ての授業が連携して何を強化していくか、重要な取り組みとなる。

【田原副学校長】

生成AIなどの進化を利用しながら進めていく。現代においては使い方の基本的な部分を理解しつつ、生成AIを丸々信じるのではなく、一つの手段として活用しつつ、自分自身の論理的思考を発展させるために助けてもらう。まずは自分でいろいろな文章を読み解く力をつけ、要約する力を培っていかなければならない。生成AIを使うことでタイムパフォーマンス

ンスが良くなっていくことはもちろん。その時間をどのように活用するか。学校全体で考えていかなければならないと思う。

他にもご意見あればお願いする。

【磯部委員】

空調については息子と話している。暑くてボーっとしてしまう。教室の室温計では設定温度まで下がっていないと聞いている。勉強する環境として、「暑い」となってしまうと、先生も人間であり集中力が途切れてしまわないかとか、色々な影響を考えてしまう。

【五十嵐学校長】

総務課が設定温度 26℃を度々確認している。しかし設定温度 26℃自体、国の指標となっているものの、恐らく今の方たちには難しい。自宅では 26℃で暮らしていないと想像する。このためとても暑いと感じていると思う。ここがせめぎ合いになっており、学校でも考えるところと思う。

【田原副学校長】

学習環境（空調設定温度）の問題は、昨年引き続き、意見としてひしひしと伝わってきている。学生にとっても切実な問題である。現在、学生自治会と連携し SDGs 活動を進めており、効果的な校内学習環境の管理方法を検討しながら、協力しながら対応したい。

以上